マルチメディアDAISY図書の可能性をよりよく未来につなぐために
～子どもたちの特性と優位感覚に基づいた効果的活用について

鹿児島県霧島市立国分南中学校
講師　松田 ひとみ

はじめに

伊藤忠記念財団のマルチメディアDAISY図書との出会いは、2013年に鹿児島県（指宿市）で開催された「図書館問題研究会全国大会」に遡ります。それ以降、10年間国語教師として、そして特別支援教育に携わる一人として、特別支援学校や公立中学校においてマルチメディアDAISY図書の実践研究を続けてきました。

今回の研究では、その10年の実践研究により明らかになってきたマルチメディアDAISY図書活用による効果と効果的活用方法について報告したいと思います。

実践研究のテーマについて

本実践研究では、メインテーマを「マルチメディアDAISY図書の可能性をよりよく未来につなぐために」としました。また、主題の具現化を図るために子どもたちの優位感覚からのアプローチを手立てとした取り組みを行ってきました。そのため、サブタイトルを「子どもたちの特性と優位感覚に基づいた効果的活用について」としました。

実践研究の対象について

本実践では、この10年の研究について振り返りつつ、以下の５つの学校における活用をもとに実践報告を行います。

① 鹿児島県立鹿児島聾学校
② 鹿児島市立坂元中学校
③ 湧水町立栗野中学校
④ 霧島市立国分中学校
⑤ 霧島市立国分南中学校

実践研究の目的

2019年６月に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」（読書バリアフリー法）が制定されました。また、2021年５月には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）の一部が改正され、国公立の学校や図書館だけでなく、私立大学や民間企業などにおいても、

今後３年以内に合理的配慮の提供について義務化されることが決定しました。今後、マルチメディアDAISY図書のもつアクセシビリティ機能は読み書きに困難をもつ子どもたちだけでなく、読書環境において多様なニーズをもつ人々にとっても、これまで以上に重要な読書媒体の一つとなることが予想されます。

本実践研究では、効果的活用方法の実践例をもとに、マルチメディアDAISY図書の可能性をよりよく未来につなぐことを目的とします。

マルチメディアDAISY図書を活用するうえでの読書ニーズと活用例

これまでの実践報告においても繰り返し述べ続けてきましたが、マルチメディアDAISY図書は有効な活用が行われれば、読書に対して何らかの障壁を感じている子どもたちにとって魔法のツールの一つとなる可能性をもつ読書媒体といえます。しかし、ただ提供するだけではより良い活用にはつながりません。

また、読書に対して何らかの障壁をもつ子どもたちはそれぞれに読書ニーズが異なります。活用する際には、提供する側が（マルチメディアDAISY図書を活用する際の）読書ニーズをよりよく理解することが効果的活用につなぐうえでの大前提であると考えます。

（１）子どもたちの特性に応じた読書ニーズ

以下の①～⑤の子どもたちの特性から考察される読書ニーズについては、これまで私が勤務させていただいた学校における10年間の実践研究における学びをまとめたものになります。

①聴覚障害のある子どもたち

聴覚障害のある子どもたちは多くの場合、補聴器や人工内耳などを使用していますが、聞こえにくさを補うことができるようにするための配慮が必要です。

・補聴器や人工内耳などを使用するうえでのノイズ軽減対策を行う
・マイリンク（首掛け式受信機）やインスパイロ（外付けピンマイク：送信機）などの機器を活用する
・視覚情報がわかりやすいものを選び、音や音声のイメージを豊かにできるものを検討する

②病弱・身体虚弱の子どもたち

病弱・身体虚弱の子どもたちは病気の種類が多様であるため、本人や保護者の許可を得たうえで担当医師や病院との連携により配慮事項について検討する必要があります。

・移動範囲や活動量が制限されている

場合には、使用可能時間を考えたうえでの提案を行う
・無菌室や病室で使用する際は、iPadでの活用を検討する

③知的障害のある子どもたち

知的障害のある子どもたちは抽象的な概念を獲得することが極端に苦手で、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすいため、わかりやすい情報提供が必要です。

・言葉のリズムや輪郭のはっきりしたものを好むことが多いため、導入時はそれらに注目した作品をピックアップして活用する
・子どもたちの実態に合わせ、活用時間や一文が長くなりすぎないものを選ぶ
・子どもたちの五感を刺激するような作品をピックアップする

④言語障害のある子どもたち

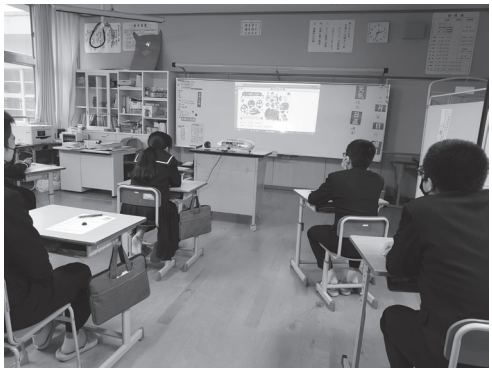
言語障害のある子どもたちは口蓋裂や構音障害、吃音など、実態に応じて発語状態もさまざまであるため、どのような性質のものであるかを確認したうえで不安が高まらないような配慮について検討する必要があります。

・作品鑑賞後に発表の場面が設定されることが予想される場合には、自信喪失につながらないような代替方法について検討する
・子どもたちの中にはある程度豊かな語彙力をもっているにも関わらず、周りの反応に対する不安から話したい気持ちを抑えている子どもたちもいるため、文字や言葉を利用する便利さや楽しさを感じられるような作品を選ぶ

⑤自閉・情緒障害のある子どもたち

自閉症のある子どもたちは感覚の発達に偏りがあり、過敏だったり、その逆の状況が見られたりすることがあります。また、情緒障害のある子どもたちは状況に合わない心身の状況を自分でコントロールすることが苦手な場面があります。そのため、使用する機器や環境面についての配慮が必要です。

・使用する場所の蛍光灯の明るさやちらつき、使用するICT機器の映像状態等についての確認をする
・慣れない場所での活用の際には不安を抱くことも多いため、事前にクールダウンする場所を確保しておく



（2）子どもたちの読書ニーズに応じた活用例

①国分南中学校での活用例（知的特別支援学級）

【自立活動】自立活動の内容項目（1）－①②⑤ 「寒い時期の健康管理について考えてみよう」

使用したマルチメディアDAISY図書

『どうしてかぜをひくの？　インフルエンザになるの？』

＜作品の情報＞

監修：清水直樹・清水さゆり

出版社：金の星社

再生時間：26分

＜生徒の実態＞

本授業は、知的特別支援学級に在籍する生徒（１年生２名、２年生２名、３年生２名）の自立活動の授業における活用例になります。

今なおコロナ禍が続く現状にあって、子どもたちは病気という見えない存在について言いようのない不安を募らせています。テレビのニュースや聞こえてくる大人の会話など、さまざまな情報の渦の中にあって、不安だけが募る現状にいることが日々の彼らの言動からもわかりました。そのため、自らの健康を守るためにできることを理解し、般化につなぐことを目標として「寒い時期の健康管理について考えてみよう」という学習を行いました。

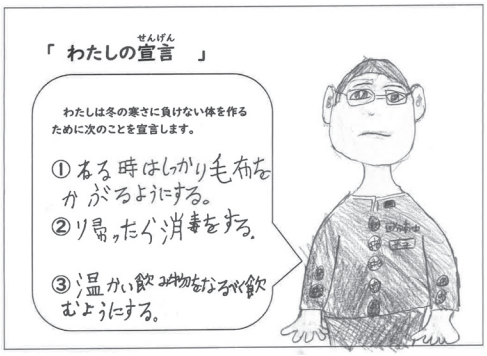
本クラスには、聴覚優位の生徒と視覚優位の生徒がほぼ半数ずつ在籍しています。また、６人ともこれまで行ったさまざまな授業の様子から体感覚による学びを好む生徒たちであることもわかっています。そのため、教科・横断的な学習としての位置づけで、生活単元学習を含めて全４時間の授業計画としました。前半の生活単元学習の授業においては体をあたためる温かい飲み物を実際にいれる学習を設定しました。生徒たちはそれぞれに自分の飲みたい飲み物についてその効果を調べ、先生方のもとにもオーダーを取りに行き、調べた効能について説明したうえで給仕を行いました。

授業をする前は「あったかい飲み物を飲むのは、コンビニエンスストアでペットボトルに入った飲み物を買ってもらうときだけで、冬だからといって家で温かい飲み物をいれて飲むことはありません。先生は何を飲むのですか？」と言っていた生徒たちでしたが、この授業後は自宅で家族に「はちみつ入りホットミルクをいれました。おい

しいって言ってもらってうれしかったです。」という内容の日記を書いてくる生徒たちもいました。

この学習のまとめの授業（4/4）において、『どうしてかぜをひくの？　インフルエンザになるの？』というマルチメディアDAISY図書を活用しました。担任である私には26分という再生時間について生徒たちの集中力の維持が可能かどうか一抹の不安がありました。

しかし、作品の絵のもつ力とわかりやすい文章のおかげで、生徒たちは終始集中力を切らすことなく、作品に見入っていました。中でも驚いたのは、一人の生徒がメモを取りながら作品を見ていたことです。入学当初から多動傾向があり、行動調整がむずかしい状況が続いていた生徒の成長の一場面を目の当たりにした瞬間でした。作品を見た後も「やっぱりマスクをつけるって大事なんだね。○○君、マスクを外したいかもしれないけど、病気にならないためにもちゃんとつけたほうがいいよ」と声かけする生徒に対して、アドバイスをもらった生徒も「そうだね。これからは気をつけるよ」と返答したり、「歯磨きも大事ってはじめて知ったな。口の中を掃除するとウイルスもやっつけられるってことかぁ」と感想を述べたりするなど、さまざまに意見交換をしており、自らの学びを深めていく生徒たちの姿をうれしく感じました。



わたしの宣言

②国分南中学校での活用例（自閉・情緒特別支援学級）

【国語】：「方言と共通語」

使用したマルチメディアDAISY図書

『日本昔話の旅シリーズ　鹿児島　方言テキスト版』

＜作品の情報＞

出版社：伊藤忠記念財団

再生時間：７分

『日本昔話の旅シリーズ　ねずみのすもうとり　方言テキスト版（山形県）』

＜作品の情報＞
出版社：伊藤忠記念財団
再生時間：６分

活用したICT機器
「ロイロノート」と「マルチメディアDAISY図書」

＜生徒の実態＞
本授業は、自閉・情緒特別支援学級に在籍する生徒（１年生８名）の国語の授業における活用例になります。本クラスには、こだわりの強さのある生徒や、身体を揺らす行動のある生徒、集中力の維持がむずかしい生徒などが在籍しています。しかし、アプローチの方法次第では学習意欲の高い生徒たちです。そのため、授業においては生徒自らが五感を使って活動する時間を多く取り入れたり、振り返りの学習では自分の言葉で考えをまとめて発表する時間を設定したりするようにしています。また、前述の知的特別支援学級の生徒たちと同じように、彼らも体感覚からの学びを好む傾向があります。そのため、本授業においては方言についての発展学習として、ロイロノートとマルチメディアDAISY図書を活用しました。

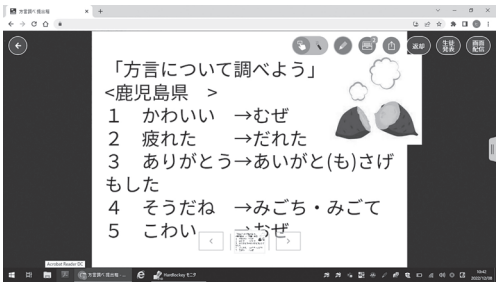
生徒たちのほとんどは、生まれてから現在に至るまで鹿児島で生活しています。しかし、彼らの親の世代も鹿児島弁を使って会話をすることは少なくなってきており、生徒たちにとって今や郷土の言葉は身近なものではなくなりつつあります。そのため、鹿児島の方言を彼らが耳にするのは祖父母の会話を通してか、あるいは鹿児島弁を使った地方CMを見たときなどに限られています。

マルチメディアDAISY図書を活用した本授業では、二つの作品の視聴が終わった後にそれぞれの会話場面を振り返り、実際に方言を使って会話をする体験を行いました。劇遊びの手法が気に入った生徒たちは二人組を作り、登場人物になりきって鹿児島弁と山形弁にチャレンジしました。

特に鹿児島弁については郷土の言葉でありながら悪戦苦闘していました。「舌がもつれそうだ」「イントネーションがむずかしい」と言いながらも楽しそうに練習を重ねていました。中には「こんなにむずかしいのにおじいちゃんやおばあちゃんは普通にしゃべっている。どんなふうにしたらあんなふうに普通にしゃべることができるのか、聞いてみよう」と話す生徒もいました。

また、山形弁については、教師からの「母音に注目してごらん。何か気づくことはないかな？」という問いに対して、「鹿児島弁と違って「い」や「え」が多くて口を大きく開かない感じかなぁ」「そうかぁ。山形県は北のほう

だから、寒い地域は口をあまり大きく開けないほうがいいのかな？」とお互いに意見を出しあいながら、方言に対する学びを深めていました。



ロイロノートの活用

マルチメディアDAISY図書のもつ機能

障害者権利条約（障害者の権利に関する条約）において「合理的配慮」は、以下のように定義されています。

> 「合理的配慮」とは、障害者が他の者との平等を基礎としてすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。

わかりやすくいえば、障害者一人ひとりのニーズによって過度の負担を課さない程度に、状況に応じて変更や調整を行うというものです。例えば、黒板が見えづらい生徒が眼鏡をかけることや、席を前にしてもらい、見えやすい場所に座ることも合理的配慮といえます。読み飛ばしをしてしまったり逐次読みをしてしまったりする生徒にリーディングトラッカーを貸し出すことも今や特別なことではありません。

マルチメディアDAISY図書には、５つのアクセシビリティ機能（①音声読み上げ機能　②文字部分のハイライト機能　③文字や絵の拡大機能　④自動ページめくり機能　⑤使用場所を選ばないICT機器としての機能）があるため、読書に対して何らかの障壁のある子どもたちにとってはさまざまな合理的配慮を兼ね備えた非常に親しみやすいツールであるといえます。

また、それは読書するという体験の喜びを知らない子どもたちだけでなく、何らかの事情により読書するという喜びを味わうことをあきらめざるをえなくなってしまった子どもたちにとっても同じです。

実際、さまざまな学校における活用の際にも子どもたちの反応は良く「黄色のハイライトがついていて見やすかった」とか「僕は読むことが苦手です。マルチメディアDAISY図書は読んでくれるのを聞くだけでいいので、楽な気持ちで作品に集中できて楽しめた」など、笑顔で話してくれることが多くありました。また、どの学校においても「他にどんな作品があるんです

か？ 今度は、わたしが選んでもいいですか？」とマルチメディアDAISY図書に対しての興味・関心を高める子どもたちも多く、ニーズの高さを感じました。

この予測困難な時代にあって、読書という体験を通して新しい景色を垣間見ることは、時に子どもたちの夢や、精神の根を育むうえでの「希望の種」になるのではないかと考えます。

実践研究のまとめ

人と人との出会いにおいてもそうであるように、子どもたちとマルチメディアDAISY図書の出会いも、ファーストインプレッションが重要であると考えます。

マルチメディアDAISY図書を活用する側の私たちは、子どもたちの多様なニーズに合った活用方法について、さらなる学びを深める必要があると感じます。

私たちが情報を受け取る際に最も受け取りやすい感覚のことを「優位感覚」と言いますが、マルチメディアDAISY図書を活用する際には、それぞれの子どもたちの特性だけでなく優位感覚にも着目すると、子どもたちの情報をキャッチする力や興味・関心の高まりに変化が見られることがわかってきました。

これを学習の際に応用すると、学びの速度が一気に高まり、学びに対する思考の深まりも高くなることもわかってきました。少しだけワクワクドキドキする仕掛けを加えることで、このような効果が見られるのであれば、マルチメディアDAISY図書は読みものとしての活用にとどまることなく、さらなる活用の広がりの可能性をもっているのではないかと思います。

おわりに

図書館学の研究者の一人として、どこにも所属せずに研究を続けるということは孤独な作業だなと、時折感じることがあります。それでも研究を続けることをあきらめきれずに、県外の図書館に足を運び、さまざまに学びを深めるとともに、図書館学に携わる一人として、さまざまな街の人の声に耳を傾け「人々が図書館に求めているものは何か」と常に考えながら、街を歩き続ける日々を長く重ねてきました。

しかし、よく考えると、それはマル

チメディアDAISY図書の研究においても同じだなと感じます。「読み書きに困難のある子どもたち」にとって、よりよいマルチメディアDAISY図書の多様な活用について、どのような方法があるのかとこの10年考え、実践し続けてきました。そして、その道の途中においても時折、独りよがりの研究になっていないかと、灯台の光を失った船乗りのような気持ちになったこともありました。私たち執筆者も、活用術を執筆される先生方のそれぞれの実践報告を紙面上で見ることはできても、それを自身の深い学びにつなげることは、なかなかむずかしい状況にあるように感じます。

現在の状況を打開し、マルチメディアDAISY図書のもつさらなる可能性をよりよく未来につなぐためにも、研究者同士が集い、語り合う場を設定していただきたいと切に願っています。

子どもたちの学びに向かう力は、未来に羽ばたく翼を大きくし、生きる力の根を強くすると信じています。

ボランティアでマルチメディアDAISY図書の製作に携わってくださっている多くのみなさま方とともに、マルチメディアDAISY図書を、読書することに障壁のある子どもたちにとっての「希望の種」として育てられるように、今後も研究を続けていきたいと考えています。